

看過され易きことども

醫學博士 長尾美知

○自然力の利用

發育の途中にある兒童の身體に關して、最も注意すべきことは、自然力を適當に利用することであり、ます。自然力と申しますのは、土、水、氣及び日光の四つです。

土は即ち土砂で、兒童を土にしたしませることで、す。これから時候もよくなりますし、子供が素足で土を踏むことが出来るようになるのはよいと思ひます。砂場で相撲をやらせるとか、また危険のないやうに注意すれば、裸足で身輕な服装をさせて、花壇の手入れをさせるなどもよいでせう、子供は手づかしたがりや、自らまいた種が芽を出し花がさくやうになれば、大變興味をもつものです。泥いぢりといふことは子供等のよろこぶ遊びで、これがまた、どんなにか身體のためによいことなのですから、例へば素足で怪我をせぬよう、また、一寸した傷でもあ

ればそこから不潔物の入らぬやうになど相當の注意をはらつて、せいよく、子供は土に親ませたいものです。

水は、淡水、若くは海水であります、殊に海水は鹽分を含み、刺戟性を有して居るので、皮膚を強固にし、身體を強健ならしむる効果が甚だ大であります。それゆゑ、海水浴がよいことは、今更申上るまでもない事ですが、海水で摩擦することも、また、よいことです。これは大に獎勵したいと思ひます。

氣は空氣であつて、これの新鮮か否かといふことは、兒童ことに、年齢の少ないほど、身體に影響することが著しいのです。家庭でも、幼稚園でも、空氣の清淨といふことには、充分注意しなければいけません。ことに幼稚園のやうに多人數一室にある場合には、必ずいつも室のどこからか換氣が出來てゐるやうに氣をつけ、また天候氣候のゆるすかぎり遊戯は戶外でさせるやうにした方がよいのです。

日光が細菌を死滅させる作用のあることは、誰も知つて居ることですが、實際は、日光浴といふことが、案外、疎かにされてゐるようです。ことに發育盛りの幼年期には、その皮膚を強固にすることに、身體の新陳代謝を増進させる點に於てその效力は偉大です、室でも子供の室は日當りのよいといふことを第一要件にすべきで、太陽のお見舞をうけない所は、反對にいろいろの病氣のもとがひそみます。

この四つの自然力は、一向、金もかゝらず、何處でも相當に、得られるもので、解りきつたことであるのに、案外、人は注意をはらはないのです。これらのものは、實に非常な天の恵であつて、決して等閑にすべきものではありません。ことに、これから時候もよくなり、活動もしやすくなるのですから、家庭でも、幼稚園でも、發育旺盛な子供達のために、充分この四つの自然力を利用するように心を用ひたいものです。もし、この四つの力を同時に利用するような、方策を考へるならば、その效驗は、それこそ神のごときものがあらうと思はれます。自然にしたりし、天然の恩恵にひたつてゐるといふことは、

すべての人の心身をのび／＼とさせて、氣分から云へば、こせつかない、おちついた、張りのあるものとします。ことに、年不相應の神經質な子どもなどは、この四つの要素の利用がたらないためといふことが多いと思ひます。都會の子供には、ことに氣をつける必要があります。

○茶匙の使ひ方

このごろは、大抵の家庭で、少し子供に咳が出れば、吸入をさせます。これはよいとして、その液をつくる時に、薬をはかる茶匙の使ひ方に氣をつけねばなりません。今、吸入料の藥品の割合を申しますならば、

大人……重曹を茶匙に一杯、食鹽を同じく二杯
子供……重曹を茶匙に半杯、食鹽を同じく一杯
右の分量を二合纏に入れて纏の肩まで、一杯にこれを入れます。さうすれば、大人ですと重曹一%食鹽二%の液子供のですと重曹〇・五%、食鹽一%の吸入料が出来るわけです。(尚、子供の場合には重曹を一杯とリ、スリンを四杯合せて同じく二合にどかしてもよろし)吸入にこれらの薬品を用ひますのは、重曹

は粘液をとかす作用があり、食鹽は粘膜に作用して、その炎症を治する效があるからです。

又、こゝに茶匙の使ひ方です。先日私がある所へ往診をしました。その患者は氣管枝加答兒でありました。其前日、私の診察所に見えた時に、吸入をすることをすゝめておきましたが、吸入料は自宅で作ることが出来るとの話でしたから、その意にまかせて置きました。患者の家でふいど其枕下にあつた吸入料を入れてある罌を見ますと、液が白色に濁濁して居る、之は變だと思つて何を吸入料にして居るかど聞いて見たら重曹を使つて居ることでした。重曹としては濁つて居るのは不思議だと思つてよく聞いて見ると、四百瓦の罌に水を容れて、其中に重曹を茶匙に一杯入れるとのこと、而して其重曹を匙で測るのにはどうするかど聞いてみたら山盛にするこの事、其れで事情は分りましたが其れは誰に聞いてさうして居るかど推問して見た處が、其返事には、昨年インフルエンザから肺炎を起した時、看護婦を雇入れたが、其看護婦から聞いたこの事でした。して見ると、粉末になつた薬を、匙で測る方法を其看護婦が知らずに出鱈目を人に教へたのでかう云ふ誤が

起つたのであることを知りました、吸入料ですから大した影響は無いとしても、之は又甚しいことと思ふ。其同じ日に、私は又他の患者へ行つて腸洗をやる食鹽水を作るのに、其處に居つた看護婦が、又同様に匙の使用法を心得て居らなかつたので、よく教へて歸つて來ました。

同じ匙を用ゐて薬物を測るのに、其處に何等かの規定が無く、唯山盛にするとしては、其山の盛り方の山の大小によつて薬物の分量に至大の影響を來すことは明瞭です。匙で液體をはかるのならば、何の造作も無いことではありますが、粉末になつた薬物を測る場合には、一定の規約を心得て居らねばなりません。即ち、匙で粉末の薬を測るには、山盛にしてはよくない、必ず其匙の中に盛つた薬物の上の面を平になる様にヘラの様なものを斜に當て、擦過するが良い、そうすると匙の中にある薬物の面が平になる。或は又薬物がボール紙などの厚紙の筒の中とか廣い口の罌とかに入つて居るものならば匙で薬物をしやくりながら、外に出す前に其容器の口の内縁で匙の上向いて薬物の入つて居る所をこすつて取り出す様にすると綺麗に薬物は匙の中に入つて居つて其上面

は平面か或は多少中高の面を作るものです。かうして重曹なり食鹽なりを茶匙で測つて取ると云ふと書物に出て居る通り、約四・〇瓦に相當するので、之を四百瓦なり八百瓦なりの水に溶解すと云ふと吸入料に適當な約一%なり〇・五%なりの重曹若くは食鹽の溶液が出来、又其二杯を一リートル即ち五合の水に溶解すと云ふと生理的食鹽水が出来る譯です。今は茶匙で測つた薬物の分量を参考の爲めに記載して見るゝ次の如くです。但し其使用した匙の薬物を盛る部分の大きさは長徑四・二糎、横徑二・七糎、高徑〇・五糎のものでした。

硼酸(細末)

二・〇

硼酸(結晶)

三・〇

食鹽

四・五

重曹

四・八

かう云ふことはかなり小さなつまらぬ事柄ではありますけれども實際に於ては非常な影響のあるもので、看護婦なり、又若い經驗の少ない醫師などもかうしたつまらぬ事を心得なかつた爲めに飛んだ誤を惹き起すことがあります。家庭でもこれはよく心得ておくべきで、吸入料のやうなものは、劇薬でないから生命にかゝはらぬとはいふものゝ、やはり薬には程度があつて、吸入料にしても、ある濃さに於てそ

の效力をあらはすので、白濁が出来るほど濃いものでは折角の薬の役をしません。

○檢温器熱

檢温器について、家庭や、幼稚園で、その使用の上で御参考にもならうと思ふので、近頃、自分のした失敗の經驗をお話させう。

それは二十六歳の患婦に起つたことであつて、ついで二、三週間程前に某醫師の紹介で自分の處へ診察を頼みに來ました。自分の診察を受けたいと云ふのは其患者が三箇月程前に分娩をして其後輕熱が在つて其れがどうしても取れない、其處で兩三名の醫師に見てもらつた處が、甲の先生は産後腎盂炎を殘して其れが爲め熱が出るのだと云ふし、乙の先生(某博士)は多少膀胱にも故障があると云ふ、丙の先生は呼吸器専門を標榜して居るのであります。其先生は少し肋膜に故障が在ると云ふので、其云ふ處が皆異ふので其何れが正當であるかと云ふ判定をしてもらひ度いと云ふ様な譯でした。其れから自分も兎に角責任が大いので随分注意して檢診をしましたが餘り的確の成績を得ません。尿も注意して再三検査して見

たが、其變化は明かでない、觸診では多少右の腎臓が過敏かと思はれたがどうも腎盂炎の症状も確ではない、又膀胱加答兒の症状も自覺的、他覺的共に陰性と云ひ度いのであります。其れから胸部の所見も自分には確かにさうとは思はれないので暫く経過を見ることに置いて、健胃劑を主として時々解熱劑を與へて見ましたが食慾も進み全身症状はずん／＼よくなるが三十七度二、三分の熱がどうしても取れない、其患婦も亦其夫もかなり神經質なので連りと其輕熱を苦にして居る、自分も兩三回診察をしたがどうも熱の原因を見出すことが出来ません。かれこれして居る間に二週間程経過してしまひました。

其内に不意と自分の頭に思ひ浮んだことは檢溫器のことで檢溫器を調べて見度いと思つて、其家ですつて居る檢溫器を持って來さして、見ると二種類の檢溫器を使つて居る、一ツは和製で〇〇檢溫器で而も特製と銘をうつつある。他の一は何處製か分らぬが無銘である、まさかにも自分も此二ツの檢溫器が揃つて狂つて居るとは思ひませんでした。所がどうでせう右の檢溫器を正確な檢溫器と比較して見た所が次の如き誤差を見出したのです。

檢溫器第一號(〇〇特製檢溫器)	誤差(十高、一低)
三十五度—三十六度	十・〇・六
三十六度—三十七度	十・〇・四
三十七度—三十八度	十・〇・二五
三十八度—三十九度	十・〇・二三
檢溫器第二號(無銘品)	

三十五度—三十六度	十・〇・五
三十六度—三十七度	十・〇・三五
三十七度—三十八度	十・〇・二五
三十八度—三十九度	十・〇・二一

此成績を見た時には自分も呆然たらざるを得ませんでした。檢溫器のくるひのある事は自分も思はぬではなかつたが銘の異つた檢溫器が二種類とも此様なくるひが在らうとは思像の至らなかつた處です。其處で此事を患者によく話して聞かせた處が現金にも其れまで腰が痛い胸が所々痛むなどと云つたのが拭ふが如く無くなつてしまつたのです。同じくるひにしても三十八度以上の時ならば〇・五位のくるひが在つても其影響は左程でも無いが、三十六乃至三十七度の最も肝要な處で〇・五とか〇・六とかの誤差、其れも低いのなら兎に角高いのであるから人を迷はすことが少なからずである。

近頃金澤醫專の十全會雜誌で原田四郎氏の「檢溫器の誤差に就て」と云ふ論文を見ましたが同氏は、大阪市立衛生試験所で大正六年十月より同八年三月迄の滿々一年半に百個の檢溫器の誤差を檢定して次の成績を得て報告して居ます。即ち

正しきもの	二二%
二分以内の誤差あるもの	四五%
標準寒暖計より低きもの	二%
二分以上五分迄の誤差あるもの	二五%
五分以上の誤差あるもの	六%

此成績で見ると〇・二度以上標準より高き誤差を示すものが百本の檢溫器中に三十一本ある譯です。檢溫器は醫師患者共に唯一の羅針盤と心得て居る次第であります之れでは誠に心細い次第で此點に就ては檢溫器を供給する製造家の猛省を煩し度いし又一面には診療に従事する醫家も大に心すべきことと思ひます。